音韻論から見た日英語の語形成：派生と複合を中心に

太田　聡
11/16/24
@筑波英語学会第 45 回大会

１．イントロダクション

1. 1. 自己紹介（？）兼若いみなさんへのエール

私は、子どもの頃（小学生の頃）から、（読書は好きではありませんでしたが、）なぜか紙の辞書・事典をめくって見るのが大好きでした。先人の知恵がそこに凝縮されているようでワクワクしました。今ならスマホで何でも簡単に調べられますが、昔はスマホやタブレット PC などないので、例えば、修学旅行に行くときにも、わからないことを調べられるようにと、カバンに辞書を何冊か入れて行き、「重いなー」という思いをする変な子でした（でも、だからと言って、語彙が多くなったわけでも、外国語をよく知っているわけでもなく、ボーッとしたまま大人になり、ジジイになってしまいました）。

だからなのか、言語研究の道に進んでからも、「紙の辞書はアイウエオ順や abc 順に項目が並んでいるけど、人間の頭の中の辞書（＝mental lexicon）はどうなっているんだろう？　それを調べられるといいなー」とずっと思ってきました。が、その解明に取りかかれることもなく、あっという間に月日が過ぎ去り、退職の日が近づいてきました。まさに、“Time flies.”です。若いみなさんは、「そのうちに」など思わずに、興味のあることには早く、そして貪欲に取り組んでいってください。

・*以下では、「敬体」と「常体」が混在しますが、ご寛恕ください。*

1.2. メンタル・レキシコンの構成は？

ニューロンのネットワークはとても複雑だから、1 つの簡単な基準では捉えることができないでしょう。が、よく指摘されるのは、言い間違い（語の入れ替わり）が起こる場合、そこには以下の特徴があるということです。

・概念的に似ていることば
・音が似ていることば

要するに、何らかの共通点のある語は、脳内で同じグループにまとめられている可能性が高いと言えそうです。

＜概念的に似ていることば＞に関して：

例えば、「先生」を「お母さん」と言ってしまう例が NHK の「チコちゃんに叱られる！」（2022 年 7 月 15 日放送）で取り上げられ、広瀬友紀先生が、「頼りになる大人」、「面倒を見てくれる」、「教えてくれる」といった概念が似ているので間違えやすい、

と解説されていました。つまり、「概念的に近い語は、脳の中で近いところに収められているからこそ、時々間違えて取り出されてしまう」ということになるでしょう。

＜音韻的に似ていることば＞に関して：
以下は、私自身が経験した音韻的に近似の語の入れ替わり例です。

私：シャンプーの宣伝に出ていたペペロンチーノみたいな名前の女優さん誰だっけ？
北原真冬氏：ペネロペ・クルスですか？（→ともに 7 モーラであることに注目！）
私：そうそう！

［妻が洋服に除菌・消臭スプレーをすると言っていたのを思い出し、「リセッシュした？」と言うつもりが、］
私：服にレリッシュした？（→ともに 4 モーラである。）
妻：服に刻んだピクルスをつけたらカビが生えるじゃない（笑）。

※ただ同じ音がいくつか含まれるだけでなく、語全体の長さが同じあることが肝要と思われる。例えば、3 モーラの語を思い出したいときには 3 モーラの語から探し、5 モーラや 2 モーラの語を一生懸命思い浮かべるようなことはしない気がする。

＜固有名詞か普通名詞か＞という観点：
窪薗晴夫氏（personal communication）は「固有名詞と普通名詞は違うところに収められていると思う。だって、固有名詞はよく忘れるから」と指摘された。

太田のコメント：普通名詞だって、とても疲れているときなどは、出てこないことがたまにある（私は、おでんにつける「からし（辛子）」がとっさに出てこなかった経験がある）。普通名詞をあまり忘れないのは使用頻度が高いからで、逆に、例えば昔の同級生の（顔が浮かんでも）名前が出てこないのは、使用頻度が低いからだと思う。

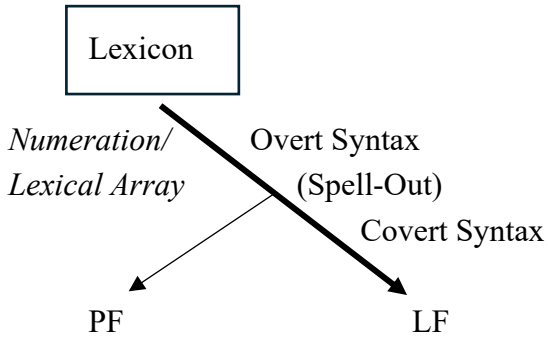
＜オマケ＞言い訳・自己正当化：
自分は脳の研究なんてできなかったくせに、我が子には、ことばの研究の素晴らしさと、それに関連した脳研究の重要性を、よく話して聞かせました。素直だった息子は、よく私の話を聞いてくれて、本当に脳科学と言語理論を結びつけようとする研究者になってくれました。その意味では、日本の言語研究に（私自身は何の貢献もできませんでしたが、）少しだけ貢献できたような気がします。が、利口な娘からは、「父さんがやってきたことと、お兄ちゃんがやろうとしていることは、所詮自己満足だよね。私は、もっと世の中の役に立つことをやりたいな」と、ぐうの音も出ないことを言われてしまいました。

1.3. 文法の構成とレキシコンの位置づけ・役割をめぐって（釈迦に説法、孔子に悟道？）
英語の強勢理論の名著の一つに Halle, Morris and Samuel Jay Keyser（1971）*English*

Stress: Its Form, Its Growth, and Its Role in Verse. Harper & Row があります。これになぞらえて、*The Lexicon: Its System, Its Organization/Structure, and Its Role in Grammar* というような本を書くことが私の夢でしたが・・・(夢は夢で終わりそうです)。

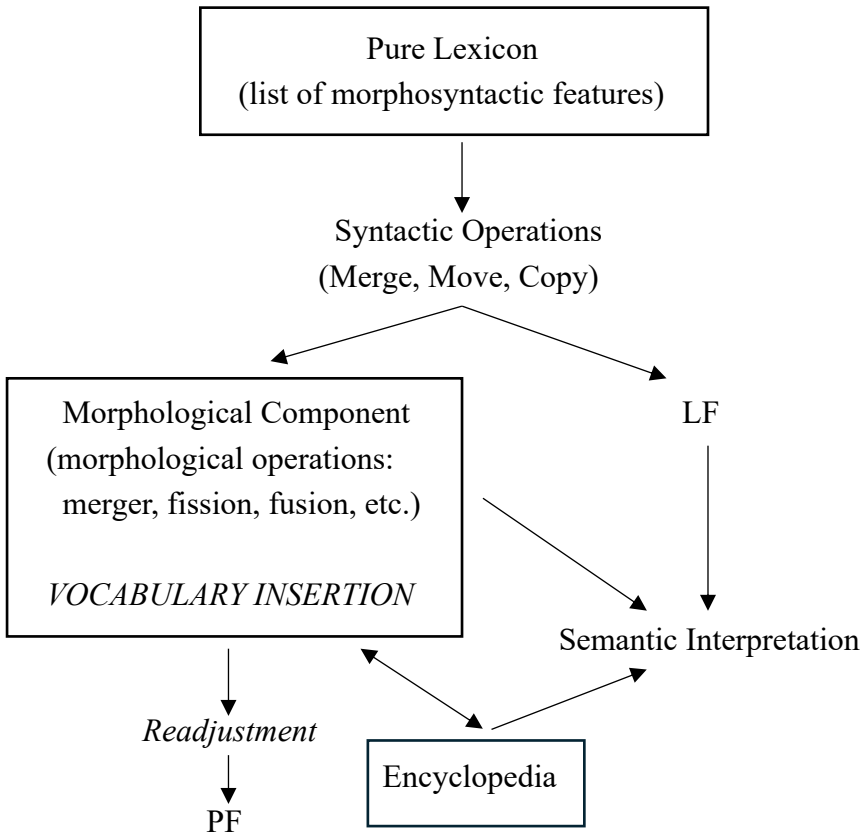
以下にいくつか代表的な文法モデルを取り上げます。

(1) （初期の？）ミニマリスト・プログラム（MP）の場合（cf. Kennedy（2000））:



個人的感想：minimal になったのは Syntax だけで、PF と LF が担う役割はむしろ増えた気がする（上半身のダイエットには成功したが、下半身はむしろ太ったようなもの？　あるいは、Syntax は必要最低限のものを入れた小さなカバンだけ持ち歩けばよいが、porter 役の PF はより大きくなったスーツケースを運んでいるようなものか？）。

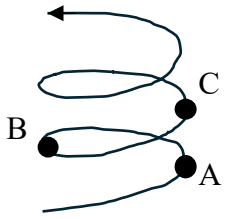
(2) 分散形態論（Distributed Morphology（DM））の場合（cf. 太田（2006））:



個人的感想：DM と MP は同じ 1993 年に始まったので、早 30 年以上経ってしまいました。「よくこんなに長く続いたものだ」と思います。同じ MIT 発祥ということもあってか、DM 派の人たちは、「自分達の理論は MP と親和性がある」と言います。ちなみに、音韻論では 1993 年に最適性理論（Optimality Theory（OT））が始まったので、「1993 年は epoch-making な年だった」と言えそうです。私が嫌なのは、DM においては、最初に屈折（inflection）の説明に力を入れて出発したからか、語形成（word formation）をレキシコンで行うことを否定してしまった点です。これでは、まるで 60 年代の変形生成文法に逆戻りしたような印象を受けます（すなわち、Chomsky（1970）以降のいわゆる Lexicalist Hypothesis より以前の状態を思い起こさせます）。生成文法の中で形態論が独立した第 4 の部門として認められる以前は、形態的（変形）操作は統語論や音韻論の一部として行われ、形態部門の位置づけがあやふやでした（cf. 太田（1997））。もちろん、DM は、60 年代の理論に比べれば、はるかに「進化」しています。が、私には、肝心の語形成が軽く扱われているようでなりませんし、形態論が、まさに文法の中で分散してしまって、形態操作が統語部門・統語操作よりも後回しになってしまっている点が、どうしてもいただけません。

※なお、lexicon の中にある情報は「素性（feature）のリストである」という考え方には賛同します。しかし、語の例を出すときに一々たくさんの素性を並べるわけにはいきませんので、以下の議論では単純に文字・スペルで表現します（私たちは、語を思い浮かべるときに、実は綴りや漢字も思い浮かべるので、私は「レキシコンに綴り・文字があるとしてもよい」と考えます。しかし、問題は、「文字を読めない人の頭の中で、語はどのように登録されているのか」ということです。昔は、ことばを使っていても、読み書きができない人がたくさんいたわけですが、そういった人のメンタル・レキシコンは、まさに音韻素性（e.g. [±voiced], [±high]）、形態・統語素性（e.g. [±plural], [±past]）、意味素性（e.g. [±animate], [±male]）だけから構成されていたのでしょうか？

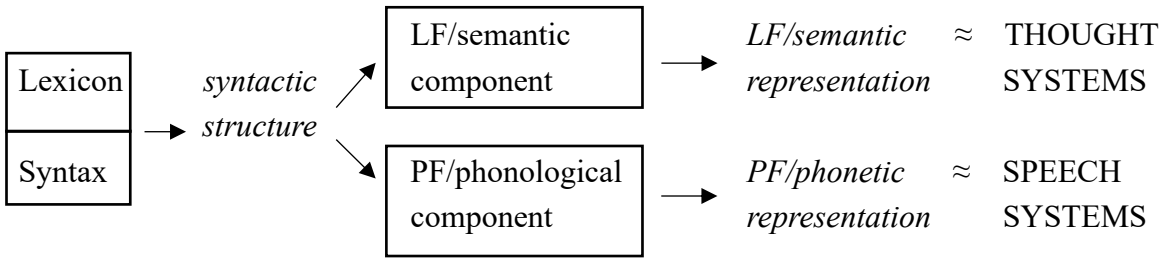
◎太田（2005）で私は、「理論は螺旋階段のように進むので、時間的に離れていても、立場的には近いものに戻ってくることがよくある」旨を述べました。ですから、DM が「語彙論者の仮説」よりも前の立場に戻ったように感じられる面があったとしても、それはやはり進化したからこそ、なのでしょう。



C は時間的には B より後になるが、距離は A に近い。

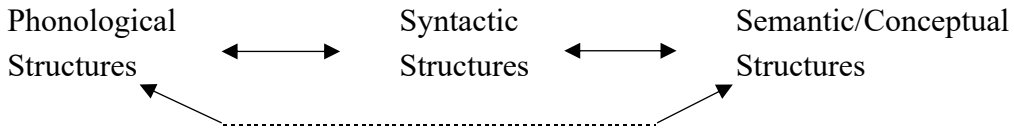
●同じ生成文法論者であっても、何に興味があり、何を説明・解明したいのかによって、文法モデルは少しずつ違ってくる。

(3) 例えば Radford（2016）は：



※Lexicon と Syntax が接合されている点が特徴的。互いにやり取りすることを表そうとしたのだろうか？

(4) 例えば Jackendoff and Audring（2020）*The Texture of the Lexicon* では：



コメント：お馴染みの“The Parallel Architecture”は示されていても、個別の事例の分析が主になっていて、肝心な lexicon の全体的・基本的構成が示されていないので、ややがっかりである。

●私は、理論的バイアスを排して、ごくナイーブに捉えた場合、lexicon と syntax の関係はどうかと言うと、それは、(一般的な) 辞書の定義からも明らかなように、「lexicon が先で、syntax がその後という順番になっているとすることが穏当だ」と思います。

syntax の語源：− F. *syntaxe* or late L. *syntaxis* (adopted in Eng. XVI) – Gr. *súntaxis* f. *suntássein*, f. *sún* SYN- ＋ *tássein* arrange.（note: f. = formed on）

The Oxford Dictionary of English Etymology より

syntax の定義：the way words are arranged to form sentences or phrases, or the rules of grammar which control this

Longman Dictionary of Contemporary English 6th ed.より

例えば、以下の(5)のように、文を発しながら、最初に浮かんだものとは違う語彙を選択し直すことが我々にはある。

(5) a. それが必要だとは思いません。
b. それの必要性を感じません。

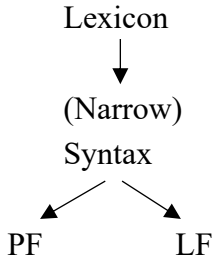
「思いません」と言うと強い主張に聞こえるので、「感じません」という感覚的な柔らかい言い回しにしたことに連動して、形容動詞の「必要だ」が名詞の「必要性」に変わり、さらに、「それが」も「それの」に変更される。

では、この「必要」＋「性」という語形成（接尾辞付加（suffix attachment））は、文形成と同じように、併合（merge(r)）によってなされると考えてよいのだろうか？ syntax と morphology は並行的・同時的だと主張したい人は“Yes”と答えるだろうが、私は“No”である。そもそも、「必要」という要素と「性」という要素はどこにあるのか・どこからやってくるのか？　答えは、もちろん **lexicon/dictionary** である[1]。ならば、「必要性」も lexicon で作ってしまってもよいではないか。

注 1）“lexicon”はギリシャ語由来で、ギリシャ語・ラテン語・ヘブライ語などの古典語辞書名でよく使われが、文法理論における学術用語としても好まれる。一方、“dictionary”も専門用語らしさを感じるが、こちらはラテン語由来なので、歴史的に見てランクがやや下と感じられるのか、文法理論の用語としてはあまり使われない（が、はっきりした理由は私にはわからない）。

結局、私は、以下のような文法の流れを仮定し、そして、それに矛盾しないような語形成のメカニズムを考え、提案したいです。

(6)



さらに、私の一番重要な仮定もしくは立場は、「語彙部門の lexicon は、単に語に関する情報の貯蔵庫として存在するのではなく、語形成を行う生産的部門でもあり、そして、そこで形成された派生語や複合語などを、統語論に供給している」というものです。私は、何も DM に喧嘩を売りたいわけではありませんし、“Anti-Anti-Lexicalism”を標榜したいわけでもありません。どちらの理論がより優れているかを明らかにしたい、というようなことを考えているわけでもありません。ただ、「句や文の部品である語は、句や文を作る前にできていた方がよいだろう」という直観的なことを大事にしたいだけです。そして、語形成も行う語彙部門が統語部門よりも先に存在すると仮定しても矛盾が生じないようなシステム・構成を提案してみたいのです。

２．派生語について：「-さ」と「-み」および-ity と-ness の付加を例に

最初に白状しておきますが、実は、私はこの 5 年間、「略語」や「混成語」や「借用語」のことばかり考えていて、派生語や複合語のことはほとんど何も考えていませんでした。しかし、略語や混成語や借用語に関することは、どうしても語形成においてはマイナーなテーマ・トピックとされがちです。実際、語形成を論じた専門本でも、略語や混成語や借用語に当てられるページは少なく、多くは派生語と複合語について論じられています。そこで、本日は、（語形成論の王道とでも言うべき）派生語形成と

複合語形成について述べさせていただきます。が、太田（2016）や太田（2017）などのだいぶ以前に書いた論文を基にしたトークになりますので、「最新さ」はほとんどないかもしれません[2]。

注 2）太田（2017）を書いたきっかけは、2003 年にミシガン州立大学で開かれた LSA Linguistic Institute に出席した際に、Harald Clahsen 先生から「-さ」と「-み」の研究の面白さを教わり、興味を抱くと同時に、自分の無学を恥じたからであった。ここに記して Clahsen 先生に感謝申し上げたい。

2.1. 「-さ」と「-み」に関する先行研究の要点紹介

・Sugioka（1984）:

Sugioka は以下の対比例を挙げて分析している。

(7) a. 川の深み／*深さにはまった。
b. 川の*深み／深さに驚く。　（原文は英文表記だが、ここでは和文にした。）

(7a)はある川の中の「特定的・具体的」な場所を指しているが、(7b)はその川を「全体的・一般的」に捉えている、という意味的な違いがある。

コメント：例えば、「彼の話には重みがある」という場合、彼の話の特定部分を指しているわけではなく、全体の印象を述べている。よって、「特定的か全体的か」という基準だけでは、「-さ」と「-み」の違いを十分に捉えたことにはならないと思う。

・Hagiwara et al.（1999）:

「-み」がつく語は五感で感じられるという特性を持つと主張している（なるほど、「甘み」は味覚、「臭み」は臭覚、「丸み」は視覚や触覚といった具合である）。また、多くの健常者と失語症患者から実験によって大量のデータを収集し、その分析を通して、「『-さ』のつく名詞は（デフォルト）規則によって作り出されるが、『-み』のつく名詞はレキシコンにリストされている（すなわち記憶されている）」と主張した。つまり、Pinker（1999）などが唱えた、不規則動詞と規則動詞の違いを捉えるために屈折形態論（inflectional morphology）において提案された「二重メカニズムモデル（dual-mechanism model）」が、派生形態論（derivational morphology）においても支持できるとしており、大変興味深い。

コメント：しかし、例えば、「親の有り難みを知る」などの場合には、具体的に見たり触ったりして感じるものではなく、心・頭で感じるものを指しているので、やはり、「五感で感じるもの」というだけでは不十分な面があるのではなかろうか。また、いわゆる「ブローカ失語患者」は規則的に作ることに困難をきたし、「ウェルニッケ失語患者」は暗記することが苦手である、という報告があることは私も承知している。しかし、脳に損傷・障害のある患者の実験・分析に実際に取り組んだ経験のある太田真理氏（personal communication）によれば、「ブローカ野だけに損傷がある患者」とか「ウ

ェルニッケ野だけに損傷がある患者」はめったにいなくて、たいていは、もっと広い部分に疾患があることが多いそうである。

2.2. 「-み」のつく名詞の一覧とその特徴

Sugioka（1984）や Hagiwara et al.（1999）は、「-み」のつく名詞はおよそ 30 語あるとは述べているが、具体的にそれを列挙していない。そこで、私は自分で、主に『逆引き広辞苑』を用いて（そして、一部では『日本国語大辞典　第二版』および『大辞林　第三版』も利用して、）実例を拾い出してみた。分類基準は一応の目安のためであって、それほど深い意味はない[3]。

(8) a. 味覚・嗅覚で感じるもの：
苦（にが）み、臭み、渋み、甘み、うまみ、辛（から）み
b. 視覚・触覚などで感じるもの：
青み、赤み、暖かみ、温（ぬく）み、痛み、かゆみ、暗み、明るみ、黒み
c. 物理的・（比喩的に）知覚的なもの：
高み、深み、柔らかみ、低み、浅み、新しみ、厚み、重み、強み、軽み、丸み、弱み
d. 心理的なもの：
優しみ、有り難み、辛（つら）み、面白み

注 3）例えば「苦しみ」などの、動詞の連用形が名詞化したものは（8）に含めていない。

使用頻度で言えば、「明るみ、高み、深み、重み」は高いのに対して、「暗み、低み、浅み、軽み」は低い。これは、英語で、例えば “How 〜?”と尋ねるときに、 “long”や“deep”や“big”はよく用いても、“short”や“shallow”や“small”はあまり用いないことと同様に、日本語でも、「背の高さ／部屋の広さはどのくらいですか？」と聞いても、「背の低さ／部屋の狭さはどのくらいですか？」とはめったに聞かないことに関連していると思われる。つまり、「-み」がつく語においても、肯定的・プラス評価される語の方が、否定的・マイナス評価の語よりも、用いられやすいのであろう。

2.3. 「-さ」と「-み」は-ness と-ity に対応するのか？

「-さ」と「-み」の分布や振る舞いの違いを意味論的・語用論的にさらに分析しても、満足のいく答えは得られない気がした。しかし、だからといって、脳科学実験をするような知力・資力はもちろんない。ならば、音韻論的な観点から分析してみようではないか。

・英語の「〜する人［もの］」（e.g. player, heater, etc.）を分析した太田（2009）では、「-or は、-ate や-ct といった綴りで終わる語――ラテン語の知識がある人にはラテン語由来の語と感じられる語――につく」とした。つまり、-er ではなく-or がつく語（e.g. decorator, projector）は、暗記しなくても、綴り・発音から予測できると主張した。しかし、「-み」がつく語を、基体（base）の末尾の発音や文字によって決められる、とい

うことはありそうにない。結局、「-み」のつく約 30 語は、そのまま暗記しているとするのが妥当であろう。

・Sugioka（1984）, Hagiwara et al.（1999）, 島村（2002）などは、「『-さ』はほとんどすべての形容詞に付加できるが、『-み』は限られた形容詞にしかつかない」という生産性（productivity）の違いが、英語の-ness と-ity に似ているとしている。確かに、-ness のつく語に比べれば、-ity のつく語は少ない（e.g. realness, reality, happiness, *happyity）。

しかしながら、例えば、英語の逆引き辞典である *Walker's Rhyming Dictionary of the English Language*（1983）で確認すると、-ity がつく語は 1,000 語以上掲載されている。30 語であれば、（英語の不規則動詞のように）暗記できるであろうが、1,000 語以上の -ity のつく語をそのまま暗記しているとは到底思えない。きっと、「ラテン系の語彙で、-al, -ic（al）, -able, -ous などで終わるもの」というような一定の基準・規則に基づいて判断・処理しているはずである。

2.4. レキシコンの構造について

2.4.1. 語彙音韻論・形態論の観点

Siegel（1974）や Allen（1978）のレベル順序づけられた形態論（level-ordered morphology）という提案を発展させた Kiparsky（1982）などの語彙音韻論・形態論（Lexical Phonology/Morphology（LPM））では、-ity と-ness などの振る舞いの違いを説明するために、以下のような分類、提案を行なった。

★強勢移動や音変化を引き続き起こす接辞は第 I 類（Class I）：-ity, -ic, -al, in-, etc.
★強勢移動や音変化を引き起こさない接辞は第 II 類（Class II）：-ness, -less, -ly, un-, etc.
★レキシコンは複数のレベル（または層（stratum））に分かれている。
★第 I 類接辞が付加されるレベルがレベル I（レベル 1）、第 II 類が付加されるレベルがレベル II（レベル 2）。

2.4.2. Level-ordered morphology のメリットと可能性

例えば、grammátical → grammaticálity という具合に-ity 付加によって強勢移動が起こるが、grammátical → grammáticalness では強勢移動が生じない。また、例えば、nature → natural のように-al 付加によって後ろから 3 番目になった母音は短音化する（trisyllabic vowel shortening（TVS））が、leader → leaderless のように-less がついても TVS は起こらない。よって、以下のようなレベルの順序づけと規則配置をすればよいことになる。

(9) レベル 1：-ity, -al などの付加　⇄　強勢付与規則や TVS 規則など
　　↓
　レベル 2：-ness, -less などの付加

（補説）level-ordered morphology によって、可能な語と不可能な語の説明・予測ができるようになった。例えば、[[[X]I]II]や[II[I[X]]]や[II[[X]II]]などは OK だが、[[[X]II]I]や[I[II[X]]]や[I[[X]II]]などは OUT である。具体的には、tox-ic$_{I}$-ity$_{I}$-less$_{II}$-ness$_{II}$ や un$_{II}$-in$_{I}$-active や un$_{II}$-friend-ly$_{II}$ は英語

として可能だが、tox-ic$_{I}$-ness$_{II}$-less$_{II}$-ity$_{I}$ や in$_{I}$-un$_{II}$-active や in$_{I}$-friend-ly$_{II}$ は不可能である。

辞書には可能なすべての語が載っているわけではない。例えば、

「あなたのその言い方はとても山口的ですね。」

「いいえ、そんなことありません。むしろ非山口的ですよ。」

という会話は日本語として成り立つはずである。しかし、どんなに大きな国語辞典でも「山口的」、「非山口的」などという語を載せることはないであろう。つまり、辞書にあるかどうかと、可能かどうかは別問題である。ところが、例えば、入試問題の採点をしている英語教員が、受験生が捻り出した英単語を見て、「辞書を見ても載ってないからこれは×（バツ）だな」などと言うのを聞く・見かけることがあった。

2.3 節で触れたように、先行研究では主に接辞の生産性を根拠に、「-さ」は-ness に、「-み」は-ity に相当するとされたが、もう一つの重要な共通性がある。それは、-ness ならば複合語にも付加できる（e.g. [well-formed]ness, *[well-formed]ity）が、「-さ」も複合語に付加しうるということである（e.g. [感慨深]さ、*[感慨深]み）。また、上の補説で述べたように、-ity の外側に-ness が生じうるが、どうやら、「-み」の外側に「-さ」を付加することも可能なようであり（e.g. 甘みっぽさ／甘みらしさ、*甘さっぽみ／*甘さらしみ）、その意味での共通性も窺える。

ならば、「-さ」と「-み」に LPM の考え方をそのまま当てはめてみると、うまくいくのだろうか？　数が少なく特殊な「-み」を先行配置させ、そこに音韻規則も連動させる一方で、非常に生産的な「-さ」は後回しにする、という(10)のような図式になるだろう。

(10) レベル 1：「-み」付加　⇄　アクセント付与規則など

　　↓

　レベル 2：「-さ」付加

(10)から予測されることは、「-み」のつく語ではアクセントの変化が生じるが、「-さ」の付加する語には変化が生じないということである。ところが、「すご'い」→「す'ごさ」のように、事実はそうはならない（日本語例のアクセントの位置――ピッチの落ちる箇所――を以下ではアポストロフィーで表す）。さて、困った・・・。

2.5. LPM はぽんこつで、OT は優れているのか？

例えば、接尾辞-able には、divide → dividable のように第 II 類と思われる場合と、divide → divisible のように第 I 類と思われる場合の 2 種類がある（また、-able の後には、breakableness のように-ness がつくことができるが、それだけでなく、falsifiability のように-ity がつく例も多くある）。つまり、-able は二重クラスの接辞（dual class affix）と言える。OT の枠組みを利用した Zamma（2013）は、第 I 類接辞の付加した最適な候補（candidate）を決める制約のランキングと、第 II 類接辞の付加した最適な候補を決める制約のランキングを、半分ずつ融合させれば、二重クラスの接辞の付加した候補の中から最適なもの選び出すことができる、という分析を行なった。非常に見事で

ある。以下では制約名等を簡略化して示す。

(11)制約は、より重要なものが左側に位置づけられ、重要性が劣るものは右側へと並ぶ（≅はランキングに差がないことを表すために用いた）。

I: a > b≅c > d

II: b > a≅d > c

I & II: a > b≅d > c

コメント：三間は、二重クラス接辞の特性を、OT ならばこのように適切に捉えて説明できるが、LPM ではできない、と主張する。確かに、二重クラスの接辞に限って言えば、LPM の枠組みではうまく処理できず、OT に軍配が上がる。しかしながら、LPM の基本精神は、特定的な・特殊な（specific, particular）ものは一般的な（general）なものに先行するというものであり、これは、我々の経験からしても、頷けるところがある。例えば、中学時代には、英語の動詞を覚えるときに、少数（だがよく使う）不規則動詞を優先的に覚え、多数の規則動詞は、特に意識しなかった（つまり、後回しにして構わなかった）であろう。規則動詞を全部覚えてからでないと、不規則動詞を覚えたくない、というような人はいないはずである。

60 年代や 70 年代の（変形）生成文法は、たくさんの規則を定式化したので、その適用順序が問題になり、それを決める原理・原則として、Elsewhere Condition（Kiparsky（1973））や Proper Inclusion Precedence Principle（Koutsoudas et al.（1974））が提案された。この適用順序の原則は、古代インドの Pāṇini が唱えた文法原理――特殊な規則は一般的な規則よりも先に適用される――に起源を持ち、我々の直観にもかなう（cf. 太田（1992））[4]。

注 4）アメリカは厳しい競争社会だから、言語学者たちも、師匠や先輩の提唱した考え方を継承していくだけではあまり有名になれないので、大きく異なる提案をしようとするものである。OT の創始者の一人は、計算理論の専門家である Paul Smolensky なので、可能な候補者を並べて最適なものを選び出すという「並列処理」方式を採用し、派生（derivation）を否定して表示（representation）を重視するという革命的な理論を編み出した。しかし、GEN が作り出す候補は本当になんでも OK という無駄なことをしているわけでは決してなく、あり得そうなものを並べて比較・検討している。また、例えば Max-IO などという忠実性（faithfulness）制約があること自体、「元が何か」を気にしているわけだから、結局のところ、派生を考えるのと似ている。

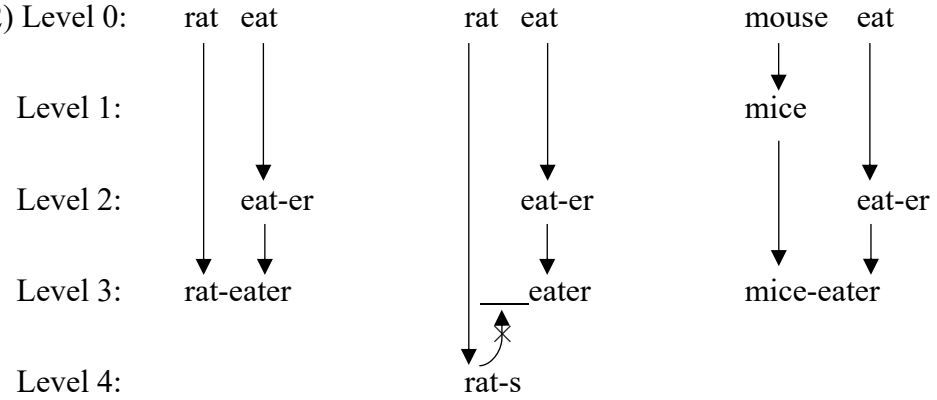
個人的には、OT は、（スポーツなどで喩えて言えば、）player ではなく critic/commentator になっているように見えてしまい、なんだか性に合わない。もっとも、例えば、子どもの言語獲得の過程で、はじめのうちは過剰一般化をして間違えたりしながらも、徐々に「正解」にたどり着いていく様子を捉えようとするのであれば、並列処理と制約のランキングの入れ替えという仕組みは、とても納得できる。しかし、文法の出来上がった大人の脳内での言語処理であれば、（複数の候補者から一々選び出すよりも、）関係する規則・原理・制約を使って、最初からあっさり 1 つの形を生み出しているとした方が、より自然な気がしてならない。

2.6. LPM は捨てたものではない

例えば、名詞の不規則な複数形と規則的な複数形といった屈折形の形成にも注目して考察すると、LPM 式の捉え方のメリットが浮かび上がる。

Gordon（1985）は、3 歳から 5 歳の子どもを被験者にして、セサミストリートの Cookie Monster のことをイメージさせた上で、“X-eater”という複合語を作らせた（つまり、X が複数であることが子どもたちの頭の中には浮かぶようにした。例えば、X が banana ならば、そこにあるバナナを、1 本ではなく、全部食べてしまうのである）。すると、非常に興味深いことに、X に rat を選んだ場合には、ほぼ “rat-eater”という答えしか出てこないが、mouse を選んだ場合には“mice-eater”という回答が出てくる。しかも、不規則形を覚えていることと対応関係があるようで、3 歳児よりも 4 歳児、4 歳児よりも 5 歳児で mice-eater の割合が増えた。注目すべきは、不規則形ならば複合語の内側に生じることができるということである。不規則な複数形は音変化を伴うので、レベル 1 で作られるとしよう。一方、規則的な複数形は、複数語尾が複合語の外側に生じるので（e.g. [boyfriend]s）、複合語形成よりも後のレベルで作られるとしてよかろう。また、複合語は、内側に派生接辞を含むことができるので（e.g. tennis [[play]er] , *[tennis play]er）、複合語形成はレベル 3 とすべきであり、さらに、規則的屈折変化はレベル 4 とすべきである（cf. 太田（1997））。なお、非派生語彙項目が入るレベルは、1 よりも前という意味で、「0（ゼロ）」とする（cf. Ohta（1987））。そうすると、以下のような LPM モデルに基づく派生過程によって、rats-eater は生じないが、mice-eater ならば生じる理由が説明できる（説明をわかりやすくするために、レベル 0 に、rat を 2 つ、eat を 3 つ挙げたが、語彙項目としてはもちろん 1 つでよい）。

(12)



◆上から下のレベルに順に下りていく派生はよいが、逆戻りする派生は不可ということである[5]。

注 5）不規則な複数形が複合語の内側に生じてもよいのならば、「人食い」は“men-eater”となるはずだが、実際には“man-eater”である。それはなぜか？　例えば、熊はまれに man-eater になるが、men-eater にはならないのではないか（cf. ドイツの笑い話――2 人の猟師が熊に出くわしたら・・・）。

2.7. 日英語の基本アクセント型のおさらい

窪薗・太田（1998）や太田（2010）で主張したように、名詞の場合、「後ろから数えて 2 番目の音節が長ければそこに、短ければもう 1 つ前、すなわち後ろから 3 番目の音節にアクセントを付与する」という、いわゆるラテン語アクセント規則（Latin Accent Rule）が、日英両語に当てはまる。無意味語・臨時語も使って試してみよう[6, 7, 8, 9]。

(13)a. スベルドロフ'スク　→　スベルドロフス'ーク
/su/（短い）　/suR/（長い）

b. コネチカ'ット　vs.　Connécticut
/kaQ/（長い）　/ti/（短い）
「コネチカット」では母音添加（epenthesis）で語末が/to/となるため、Connecticut と音節の数え方がずれる。

c. Américа　vs.　Àmerínca, Àmeróyca
（短い）　（長い）　（長い）
つまり、後ろから 2 番目の音節が長ければそこに強勢を置き、Àrizóna や Màssachúsetts などと同型になる。なお、強勢が与えられた音節の前に 2 音節以上ある場合には、前方に強勢を転移させるのが英語の特徴であるが、それに関する原則やパラメーターの設定についての議論は、今回は省略する。

注 6）現代英語は、古英語や中英語とは違って、母音の区別においては、「長短」ではなく、「緊張（tense）・弛緩（lax）」（[±ATR]（Advanced Tongue Root か否か）と言ってもよい）が重要である。が、アクセントを論じる際には、例えば、CV は「短い音節／軽音節（short syllable/light syllable）」、CVV や CVC などを「長い音節／重音節（long syllable/heavy syllable）」と呼ぶことにする。

注 7）英語の名詞は、語末音節の母音が長ければ、例えば ántelòpe, lìmousíne のように、そこにも強勢を付与するが、今回は、この点について詳しく論じる余裕がないし、必要もないであろう。

注 8）辞書では、A-mer-i-ca と分節（syllabification）されているが、これはおそらく、母音が開音節では長くなるが（e.g. me /mi:/）、閉音節では短くなる（e.g. met /met/）という原則に合わせて、America の-me-を/me/と読ませるために-mer-と分節しているのであろう。

音節の切れ目を確かめる単純で確実な方法は、リピート法である。例えば、「shampoo の第 1 音節だけ 2 回繰り返して言ってください（1-2 → 1-1-2）」とネイティブスピーカーに求めれば、“sham-sham-poo”という答えが得られるので、sham-poo という分節が正しいことが確認できる（cf. Fallows（1981））。

Wayne Lawrence 氏（オークランド大学）に、「America の第 2 音節だけ繰り返して言ってください」と求めたところ、予想通り、“A-me-me-ri-ca”という回答が得られた。Lawrence 氏の発音は nonrhotic なので、その影響があるかもしれないと思い、念の為、山口大学の同僚で、アメリカのアイダホ州出身の Ariel Sorensen 氏に尋ねたところ、やはり同じ A-me-me-ri-ca という回答だった。よって、辞書の表記とは異なるが、A-me-ri-ca という分節に基づいてここで

は議論している。

注 9）英語の強勢を扱った専門書の中には、「強勢があればそこは長くなる」というような述べ方をしているものがある（例えば、川越（2007））。この見解には私は反対したい。もちろん、無強勢音節は母音が曖昧母音（schwa）に弱化するので短くなり、強勢のある箇所は（相対的に）長く聞こえるのは確かである。しかし、上の（13c）からも確認できるように、「長ければそこに強勢を置く」という計算をしていると捉えるべきである。つまり、条件と結果が逆である。

英語の動詞は、最終音節が長ければそこに（ただし、子音が続くことで長くなる場合には、子音が 2 つ以上必要であることに注意）、短ければもう 1 つ前、すなわち後ろから 2 番目に（たとえそこが短くても）強勢を置く。そして、面白いことに、英語の形容詞には（接辞の有無によって、）名詞的なものと動詞的なものがある[10]。

(14)a. cáncel, consíder, inhábit, applý, caréen, désignàte, collápse, insíst, exémpt
b. sólid, intrépid, compléte, robúst, succínct（←接尾辞なしの形容詞は動詞的）
c. pérsonal, lógical, oríginal, gèrmicídal, incidéntal（←接尾辞つきだと名詞的）

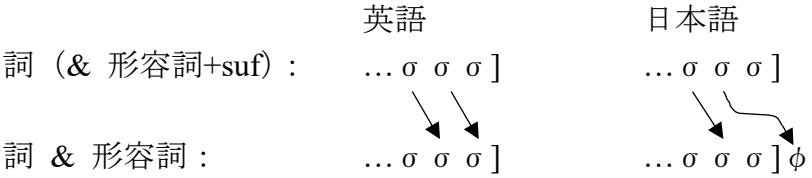
注 10）例えば、person の-son は重音節だが、-al がつくと再分節（resyllabification）が起こり、per-so-nal となる――すなわち、(14c)で二重下線を付した-so-が軽音節になる――ことに注意されたい。

(15)N(oun): [+N], [−V]; V(erb): [−N], [＋V]; A(djective): [＋N], [＋V]; P(reposition): [−N], [−V]
※形態・統語的に共通性があるものは、音韻的にも同じパターンを示す。

(16)日本語の動詞と形容詞のアクセント型：
a. およ’ぐ、はし’る、なげ’る、あげる、まわる、はじめる
b. しろ’い、ふる’い、たのし’い、くらい、やさしい、あかるい

◎対蹠的（antipodal）と言ってよいほど、地球の反対側でそれぞれ発展した別々の言語である英語と日本語が、まるで裏で打ち合わせをしたかのように――英語さんが「日本語さん、私は、名詞に比べて、動詞や形容詞のアクセントは後ろに配置するから、あなたもそうしませんか？」と言うので、日本語さんが「じゃあ、私も、体言のときに比べて、用言のアクセントは後ろになるようにしますね」と応えているかのようである――、同じ規則を使って、同じようなパターンを作り出している[11]。

(17)



（日本語の動詞と形容詞は-(r)u や-i で終わるわけだから、最終音節が長くなることはなく、英語とまったく同じパターンには、したくてもできない。）

注 11）なお、日本語の名詞には、長いわけではない語末から 2 番目や語末の音節にアクセントがくる例もある（e.g. いわゆる中高型の「たま'ご」、いわゆる尾高型の「あたま'」）。しかし、こういったパターンは減り続けており、いわば絶滅危惧種状態である。そして、後ろから 3 番目にアクセントがあるか、無アクセントの例が、多数派になりつつある（例えば、「しない（竹刀）」は、1940 年代ごろまでは「しな'い」であったが、現在は「し'ない」である。私の名前も、出身地の方言では「さと'し」だが、いわゆる標準語では「さ'とし」となろう）。つまりは、法則・規則がわかれば、今後の変化を予測することもできるのである。

●なお、特に 4 モーラ語の場合には、日本語の名詞は平板型（無アクセント）になりやすいことを補足しておく（e.g. イギリス、エジプト、ベトナム、ブラジル、etc.）。

ちなみに、いわゆる「形容動詞」は、日本語教育の分野では「『な』-形容詞」と呼ばれることがあるが、例えば、影山（1993）や Tsujimura（2014）では「形容名詞（adjectival noun）」とされている。そして、なるほど、活用させると名詞的であることがわかる（「綺麗」は「きれー」と長音にもなるが、ここでは「きれい」とした）[12]。

(18)	本 $_{N}$	大きい $_{A}$	綺麗 $_{AV→AN?}$
現在形：	ほん-だ	おーき-い	きれい-だ
過去形：	ほん-だった	おーき-かった	きれい-だった
否定形：	ほん-じゃない	おーき-くない	きれい-じゃない
過去否定形：	ほん-じゃなかった	おーき-くなかった	きれい-じゃなかった
推量形：	ほん-だろう	おーき-い-だろう	きれい-だろう

注 12）歴史的には、形容動詞は形容詞を補うために生じた、すなわち後から出現したとされるが、幼児の言語習得の順序も形容詞→形容動詞のようで、2 歳児であれば、「きれいじゃない」ではなく、「きれーくない」と言ったりする（太田（1991）参照）。

そしてさらに、（語幹（stem）がどこまでかといったことではなく、単純に）辞書形――すなわち、「な」や「だ」をつけない形――で考えてみると、以下の（19）のように、形容動詞のアクセント型は名詞と同じであることに気づく。

(19)形容動詞のアクセント配置・型：
し'ずか（∵後ろから 2 番目の音節が「ず」と短いので、もう 1 つ前に。）
ハ'ンサム（∵「サ」が短いので、もう 1 つ前の音節の「ハン」に。）
ナイ'ーブ（∵「イー」が長いのでそこに。）
しあわせ（∵4 モーラであり、無アクセントになる。）

2.8. 「-さ」と「-み」がつく例のアクセントの確認

アクセント型は『NHK 日本語発音アクセント辞典　新版』(1998)(*NHK 1998* と略す)で確認したが、この辞書に載っていないもの(⇒斜体の強調文字にした)は、『日本国語大辞典　第二版』(2000-2002)を用いて確かめた。

(20)a. あかい　→　***あかさ***
かたい　→　***かたさ***
くらい　→　***くらさ***
つめたい　→　***つめたさ***
b. ふる'い　→　ふ'るさ
せま'い　→　せ'まさ
かわい'い　→　かわい'さ、かわ'いさ
はかな'い　→　はかな'さ、はか'なさ
あたらし'い　→　あたら'しさ、あたらし'さ
おもしろ'い　→　おもし'ろさ、おもしろ'さ
みぐるし'い　→　***みぐる'しさ***
うつくし'い　→　***うつく'しさ***
かがやかし'い　→　***かがやか'しさ***
けばけばし'い　→　けばけば'しさ

●「-さ」がつく派生名詞のアクセント型は、「基体が無アクセントならば『～さ』形も無アクセントになり、基体が有アクセントならば、通常の名詞アクセント規則に従う」と一般化できる。ただし、下線を施した例では「-さ」の直前にアクセントが付与されているが、これは、例えば「つくば'-し(つくば市)」のような後半が 1 モーラしかない複合語のアクセント型に倣った結果ではないかと推察するが、はっきりとしたことはわからない。

(21)にが'い　→　にがみ'　(「にがみ-がある」と具合に格助詞をつけるとわかりやすい。)
くさ'い　→　くさみ'
しぶ'い　→　しぶみ'
あまい　→　あまみ
うま'い　→　うまみ、うまみ'
から'い　→　からみ'、からみ
あお'い　→　あおみ、あおみ'
あかい　→　あかみ
あたたか'い　→　あたたかみ、あたたかみ'
ぬく'い　→　ぬくみ'
いた'い　→　いたみ'
かゆ'い　→　かゆみ'、かゆみ
くらい　→　***くらみ***
あかるい　→　あかるみ

くろ’い　→　くろみ’
たか’い　→　たかみ、た’かみ
ふか’い　→　ふかみ’、ふかみ、（ふか’み）
やわらか’い　→　やわらかみ
ひく’い　→　***ひくみ’***
あさい　→　***あさみ***
あたらし’い　→　あたらしみ、あたらしみ’
あつい　→　あつみ
おもい　→　おもみ
つよ’い　→　つよみ’
かるい　→　かるみ
まるい　→　まるみ
よわ’い　→　よわみ’
やさしい　→　やさしみ
ありがた’い　→　ありがたみ、ありがたみ’
つらい　→　***つらみ***
おもしろ’い　→　おもしろみ

●「-み」のつく派生名詞の場合には、「(『-さ』派生名詞と同様に、）基体が無アクセントであれば、『〜み』形も無アクセントになる。が、基体が有アクセントであれば、語末にアクセントが移る」とまとめることができる。この（名詞なのに）語末にアクセントを付与する特殊な規則を「『-み』アクセント規則」と呼ぶことにする。ところで、下線を施した例から推測できるように、「-み」アクセント規則は不要となりつつあり、代わって、無アクセント化が進行していることがわかる。なお、二重下線を引いた「た’かみ」だけは通常の名詞アクセントパターンを示しており、また、波線下線を引いた「ふか’み」だけは動詞・形容詞のアクセントパターンになっている。

2.9. 提案

「-さ」と「-み」がつく派生語に共通していることは、基体の形容詞が無アクセントであれば無アクセントになるということである。ところで、形容詞では、何かを手がかりして、「有アクセント」になるか「無アクセント」になるかを決めることができるのだろうか？　私には、例えば以下の例の対比からしても、アクセントの有無に関する基準（criterion）のようなものはないと思われる。

(22)a.　ふか’い、くさ’い、あつ’い（暑い）、さみし’い、はずかし’い
　　b.　あかい、あさい、あつい（厚い）、かなしい、むずかしい

では、形容詞のアクセントの有無はどのように決まっているのだろうか？　答えは「暗記」である。形容詞は open class の語類であるので、必要に応じて数を増やすことができる（e.g. 気持ち悪い → きもい、いい → 気持ちいい、痛気持ちいい、しょぼしょぼ → しょぼい、赤っぽい → 緑っぽい）。しかし、日常で用いる形容詞は、お

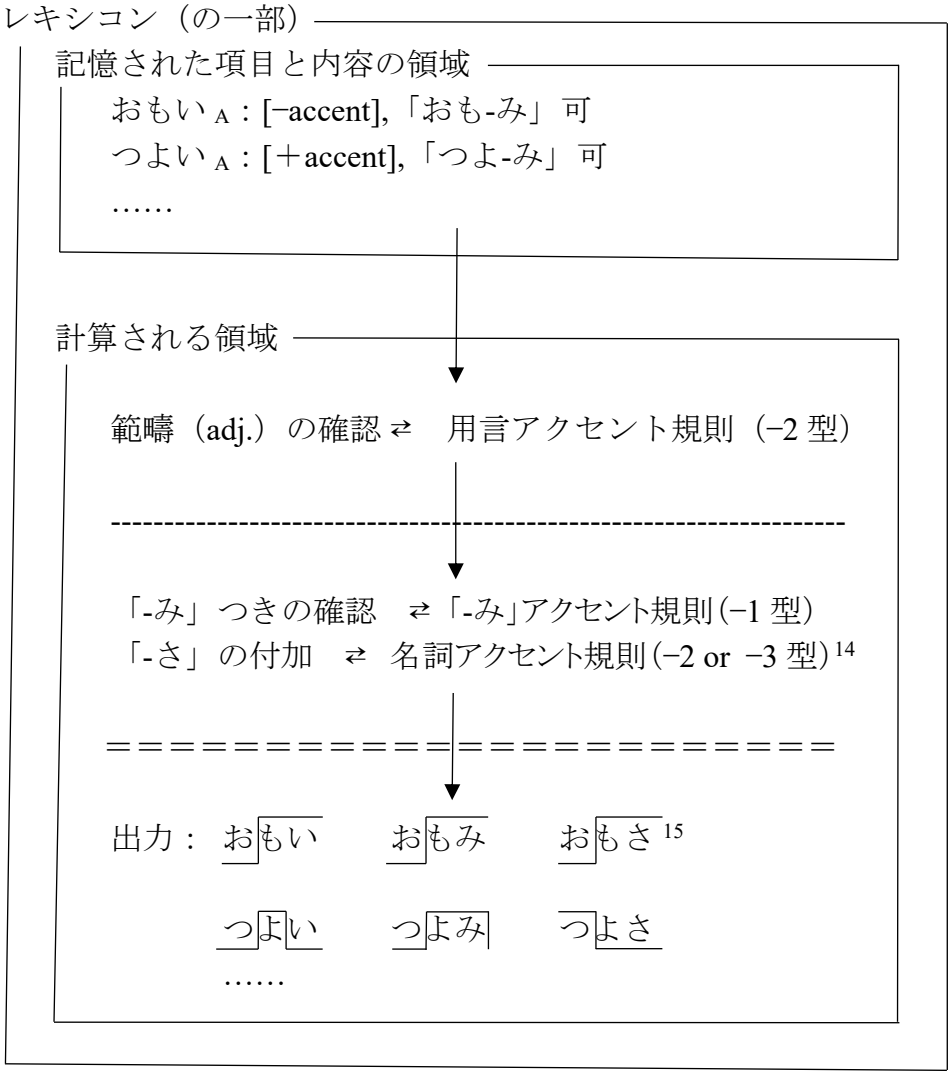
そらく以下に列挙した 120 語程度であろう。よって、（これらの語のアクセントの有無を）暗記することは無理ではないだろう[13]。

大きい、小さい、新しい、古い、いい（よい）、悪い、暑い、寒い、熱い、冷たい、難しい、易しい、高い、低い、浅い、深い、安い、おもしろい、忙しい、楽しい、白い、黒い、赤い、青い、淡い、近い、遠い、早い、速い、遅い、多い、少ない、乏しい、暖かい／温かい、ぬくい、涼しい、甘い、辛い、苦い、おいしい、うまい、まずい、臭い、渋い、重（た）い、軽い、ほしい、広い、狭い、若い、長い、短い、荒い、粗い、濃い、薄い、細かい、細い、太い、でかい、厚い、丸い、明るい、暗い、まぶしい、危ない、痛い、かゆい、鋭い、鈍い、硬い、柔らかい、眠（た）い、強い、弱い、すごい、寂しい、優しい、えらい、幼い、賢い、おとなしい、かわいい、おかしい、うるさい、図々しい、ずるい、いやらしい、くどい、苦しい、つたない、正しい、詳しい、美しい、みぐるしい、汚い、うれしい、悲しい、恥ずかしい、親しい、憎い、しつこい、しんどい、珍しい、酸っぱい、ひどい、怖い、素晴らしい、輝かしい、厳しい、怪しい、うらやましい、きつい、つらい、悔しい、懐かしい、等しい、貧しい、むなしい、はかない、めでたい、ありがたい、もったいない、ややこしい

注 13）「気持ち悪い」、「心細い」、「面倒臭い」などの複合形容詞、および「生々しい」、「ふてぶてしい」、「よそよそしい」などの畳語形容詞は、ここでは考察外とした。

ならば、日本語の文法上のレキシコンは（メンタル・レキシコンも？）、おそらく、暗記したものを蓄えておく部分と、規則で計算できる部分に分かれているのではなかろうか。よって、以下の仕組みを提案したい。

(23)



注 14）「-さ」がつく語の中で、後ろから 2 番目の音節が長くてそこにアクセントがある例を見つけるのは難しいが、例えば、形容動詞の「プリティー」に「-さ」を付加した「プリティーさ」であれば、後ろから 2 番目で長い「ティー」にアクセントがつくはずである。

注 15）「おもい」が[−accent]と指定されているため、「おもい、おもみ、おもさ」は、実質、3 種のアクセント規則を素通りすると考えてもよい。

2.10. 要点のまとめ

日本語の「-み」と「-さ」のつく派生語のアクセント型を説明するには、英語の-ity と-ness のついた派生語の違いをうまく捉えることができた LPM の提案をそのまま用いることはできない。Pinker 的に、記憶（暗記）によるものと規則によるものの区別をした上で、記憶部分を先行させ、規則処理が可能な部分は後続させるモデルにし、さらに「〜み」形だけに適用されるマイナー規則も必要、ということを論じた[16]。

注 16）新たに作られた語も、何度も使っているうちに語彙化する――すなわち、覚えてしまい、レキシコンの中に登録される――ということがあるだろう。よって、語形成過程と関連

した規則の働きを論じるのは、「最初にその語が作られるプロセスを明らかにしようとすることである」と言えるかもしれない。

2.11. その後の調査結果

2016 年 5 月に『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（*NHK 2016* と略す）が発行されたが、太田（2017）の原稿は 2016 年の 3 月ごろに書いたため、この新辞典の記述を反映させることができていなかった。そこで、追加で確認してみた。ところが、*NHK 1998* で示されたことと特に大きな変化はなかった。一応、2 通り以上のアクセント型が *NHK1998* で示されたものに関してだけ、➡の右側に、*NHK 2016* の記述を示した（ただし、カタカナ表記を平仮名表記に変更した）。*NHK 1998* では、共通語アクセントとしてよりふさわしいものを先に、そうではないものを後に示している。対して、*NHK 2016* では、第一に推奨するアクセント型を 1 つだけ見出しで立て、許容される第 2 候補や第 3 候補のアクセント型は、見出しの右横に、例えば、み――「『み』にアクセント（核）がある」の意――や、□――「平板型・無アクセントになる」の意――などの記号で示している。しかしながら、2 つの辞書に載っているアクセントの記述内容は畢竟同じである[17]。

注 17）(20b)の「-さ」がつく名詞において 2 通りのアクセント型が示された例についても、*NHK 2016* において、同じ 2 通りのアクセント型が挙げられている。

(24)にが’い　→　にがみ’
くさ’い　→　くさみ’
しぶ’い　→　しぶみ’
あまい　→　あまみ
うま’い　→　うまみ、うまみ’　➡　うまみ、み
から’い　→　からみ’、からみ　➡　からみ’、□
あお’い　→　あおみ、あおみ’　➡　あおみ、み
あかい　→　あかみ
あたたか’い　→　あたたかみ、あたたかみ’　➡　あたたかみ、み
ぬく’い　→　ぬくみ’
いた’い　→　いたみ’
かゆ’い　→　かゆみ’、かゆみ　➡　かゆみ’、□
くらい　→　***くらみ***
あかるい　→　あかるみ
くろ’い　→　くろみ’
たか’い　→　たかみ、た’かみ　➡　たかみ、た
ふか’い　→　ふかみ’、ふかみ、（ふか’み）　➡　ふかみ’、□、か
やわらか’い　→　やわらかみ
ひく’い　→　***ひくみ’***
あさい　→　***あさみ***
あたらし’い　→　あたらしみ、あたらしみ’　➡　あたらしみ、み

あつい　→　あつみ
おもい　→　おもみ
つよ'い　→　つよみ'
かるい　→　かるみ
まるい　→　まるみ
よわ'い　→　よわみ'
やさしい　→　やさしみ
ありがた'い　→　ありがたみ、ありがたみ'　➡　ありがたみ、み
つらい　→　**つらみ**
おもしろ'い　→　おもしろみ

※結局、*NHK 1998* と *NHK 2016* のどちらにおいても、「〜み」という語に複数のアクセント型が認められる 9 例のうち、第一に推奨するアクセントが語末にあるのは 3 例だけで、他の 6 例は無アクセントになっている。したがって、例えば数十年後には、さらに無アクセント化が進み、最後は無アクセント（平板型）に収束すると思われる。

３．複合語のアクセントについて

3.1. 日本語の複合語アクセントの基本パターンなど

私のゼミ生だった大江俊平くんが、「ポケモンは、進化すると、名前が長くなり、かつ濁音もしくは有声子音が増えることがわかった」とレポートに書き、実例として "/hitokage/ → /rizaRdoN/"を挙げていたのだが、私は即座には理解できず、「なんで『人の影』が進化したら『リザードン』になるの？」と間抜けな質問をしてしまった経験がある。

(25)
ひとかげ → ヒ-トカゲ（fire lizard）→　リザードン
ひとかげ → ひと-かげ（人影）→　??リザードン

「ヒト'カゲ」とアクセントをつけて言ってもらえれば、（無アクセントの「ひとかげ（人影）」とは違うので、）もちろん、私もすんなり理解できたはずである。こうしたことから、我々は、アクセントを複合語の意味区別に利用していることが窺えるのである。

では、まずは日本語の複合名詞のアクセントの基本パターンから見ていこう[18]。

(26) a.　後半要素が 1〜2 モーラしかない場合には、前半要素の最後にアクセントが置かれる。
e.g. じんじ'ぶ（人事部）、やま'でら（山寺）、かんだ'がわ（神田川）
b.　後半要素が 3 モーラ以上である場合には、後半要素の最初にアクセントが置かれる。

e.g. つくばし’てん（筑波支店）、つくばだ’いがく（筑波大学）

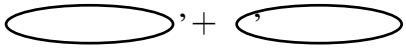
c. 後半要素のアクセントがいわゆる中高型の場合には、そのアクセントが継承される。

e.g. エクスプ’レス　→　つくばエクスプ’レス

注 18）なお、言語分析をしていると、「短いものには例外的なものが案外多くて、長いものの方が規則通りにいく」ということがよくあるが、複合語のアクセントも、後半要素が短いものには例外的なパターンがよく観察される。例えば、「ロースハ’ム」、「いなかみ’そ（田舎味噌）」、「うろこぐ’も（鱗雲）」などは(26a)の規則に反している。

（補説）少し補足すれば、日本語の複合名詞のアクセントの計算では、語末の 1 フット（＝2 モーラ（ただし、語境界がある場合には 1 モーラだけになることもある））を一旦見えない（invisible） 状態にし、それによってアクセントも消えてしまった場合には、アクセントを前方に配置し直すという作業をしていると考えられる。例えば、「いし＋あ~~たま’~~ → いしあ’たま（石頭）」、「ホット＋コー~~ヒ’ー~~ → ホットコ’ーヒー」となる（取り消し線は見えなくなったことを表している）。しかし、「エクスプ’~~レス~~」などは元々のアクセントが消えずに済むので、それがそのまま複合語において利用されるわけである（詳しくは太田（2018a）を参照されたい）。

(27) 日本語の複合語のアクセントは、前半要素と後半要素の境界に近いところに配置される、とまとめることができよう。



3.2. 非標準的なアクセント型

次の漢語の複合語例のアクセント型を観察してみよう。

(28) 憲法改正（ケ’ンポーカイセー）、門戸開放（モ’ンコカイホー）、自信喪失（ジシンソーシツ）、選手宣誓（セ’ンシュセンセー）、消息不明（ショーソクフメー）

窪薗（1995）は、(28）のような例に対して、「<u>[主語］＋［動詞／形容（動）詞]、［目的語］＋［動詞］といった意味構造をなすものであり、特に漢語を含む場合に、複合語規則の適用を受けにくくなる</u>」と述べている。

3.2.1. 漢語複合語にはアクセントのバリエーションがなぜ多いのか？

私見を述べれば、それは、漢語が連濁できないからである。和語は、以下のように、アクセントだけでなく、連濁の有無によっても、語の切れ目（意味の違い）が把握できる（(29b)は仮に作った例である）。

(29)a. うちばかま（打袴）∵「〜ばかま」と連濁するので袴のことだとわかる。

b. うちはがま（打刃鎌？）∵「〜がま」と連濁するので、例えば、「『打刃物』と呼ばれる鍛冶技法で作られた鎌かな？」など思うはずである。

一方、漢語の場合には、（「カブシキガイシャ（株式会社）」などの例外はあるものの、）基本的に連濁しないので、意味解釈においてアクセントの型がそれだけ重要になり、アクセント型の区別・分化が起こったと推測できる。なお、外来語の複合語の場合にも連濁は起こらないが、だからと言って、(28)のような例は現れない。それは、外来語複合語の数・種類がそもそも少ないからであろう。

3.2.2. 窪薗説への疑問

(28)のような複合語の意味を考えれば、確かに「主語＋動詞」や「目的語＋動詞」などになっているように感じる。しかしながら、「主語」や「目的語」とは何であろうか？　例えば、Crystal（2008）は“A term used in the analysis of grammatical functions to refer to a major constituent of sentence or clause structure, …”と定義している。したがって、もし窪薗の分析を受け入れれば、語形成に統語論で生み出される要素の情報を使うことになる。つまりは、(6)に挙げたような文法の仕組み（各部門の順序）を否定して、Lexicon ← Syntax といった「逆流」を容認することになってしまう。

3.3. レキシコンにある情報だけを頼りにする提案

本節の議論は主に太田（2018b）に基づいている。

(30)中村・金子・菊地（2001: 28）より

cut　(i)　[kʌt]
　　(ii)　a. V
　　b. [___ NP]
　　(iii)　a. [Agent, Theme[−Abstract]]
　　b. x divides y by separating with a sharp edge or instrument.

※レキシコンにおいては、Subject や Object といった情報はなくても、動詞が、外項（external argument）――下線を引いて表した――として Agent を、内項（internal argument）として Theme を要求するというようなことであれば、記載・指定されているとしてよい。であれば、この項（argument）の情報を利用しない手はない。

「項」とは、文の中で具現されるときには、以下の例（put: Agent, Theme, Location）のように、結果として NP（DP）や PP になるものであり、単一の名詞だけで現れるわけではない。

(31)a.　The boy put a vase on the table.
　　b.　*Boy put vase table.

そこで、項となるものは、単一の名詞よりは大きくなる性質を備えた要素であるので、「N よりは大きい」という意味で、（“NP”は用いずに、）プラス記号を付加して “N+” と表すことにする。

そうすると、項をとる動詞・形容詞類が、その項を前部要素として取り込んで複合

語を形成する場合には、(26)に挙げた通常のアクセントの複合語とは違って、アクセントは、前半要素と後半要素が独立に計算されている、と捉えることができよう。つまり、(26)のような“modifier + head”（修飾部＋主要部）の関係で結びつく複合語は、前半要素が単一の名詞や形容詞としての資格しか持っていない（例えば、「山寺」は「山」という名詞と「寺」という名詞の複合でしかない）が、「憲法改正」などの前半要素は、より大きな構成単位だからである。この違いを図解的に示せば、以下のようになる[19,20]。アクセントの計算において、(32 a′)は主要部が前半要素を支配下に置いて一体化することを、(32 b′)は、前半要素がより大きな成分であるため、主要部がそれを支配下に置けない（結果として、(32b)のようにアクセント付与が別々になる）ことを、それぞれ表している。

(32)a. $[[N/A][N]]_N$（⇐ 全体を 1 語としてアクセント付与）

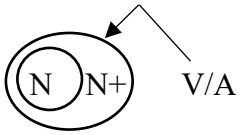
b. $[[[N]]_{N+}[V/A]]$

↓（⇐前半要素と後半要素のアクセントを別々に付与）

$[[N]・[V/A]_N]_N$（“・”はアクセントの独立性を表現するために用いた。）

a′.

b′.



注 19）形容詞が名詞を修飾する関係で結びついた日本語の複合語例も挙げれば、（形容詞の「-い」は落ちるが、）「長雨」、「荒波」、「高値」、「黒髪」などがある。

注 20）例えば『明鏡国語辞典　第三版』（大修館書店）を見ると、「改正」という語の品詞は《名・他サ変》となっている。つまり、「改正」は、「する」がついていなくても、動詞らしさが含まれているとしてよいのである。よって、(32b)では後半要素を“V/A”のままにしている。

※「憲法改正」では「前半にアクセントが付与されている」と捉えるのは間違いである。「憲法」は「ケ’ンポー」であり、「改正」は「カイセー」（すなわち無アクセント）なので、それぞれのアクセント型を保った結果、「ケ’ンポーカイセー」となるだけである。「自信喪失」と「消息不明」は全体が無アクセントになるが、それは、「自信」と「喪失」、「消息」と「不明」の両方が無アクセント語であるからである。

本節での主張・分析をまとめつつ（関連する新たな例も使って）補足をすれば、次のようになる。

・例えば、「赤蜻蛉（あかと’んぼ）」や「山桜（やまざ’くら）」のような「修飾–被修飾」の関係で結びついた語は、通常の複合語アクセントを持つ。

・例えば、「改正」や（「四民平等（シ’ミンビョードー）」の）「平等」は以下のような項構造（argument structure）を備えている。

カイセー：Agent <Theme>（< >は内項であることを表す。）
ビョードー：Experiencer

・「主語」や「目的語」といった概念・単位によらずとも、(28)に挙げたような例に関しては、「項の種類および（結果として主語になる）外項か（結果として目的語になる）内項か、を指定する項構造を持った語が主要部になる複合語は、アクセント付与において、項構造を持たない語が主要部になる複合語とは異なる振る舞いを示す」という一般化が可能である。

3.4. 英語の複合語に日本語と同じことが言えるのか？

英語の複合語は、よく知られているように、前半要素により強い強勢が与えられることが多い。

(33)blácklbòard, wíndmìll, snáil màil, blácklboard eràser, gréenhouse effèct

(33)のような modifier＋head 型の複合語は「限定[修飾]複合語（attributive compound）」と呼ばれ、英語の代表的な複合語としてよく紹介される。しかし、英語にも、動詞とその項（目的語）である要素が合わさった複合語があり、「従属複合語（subordinative compound）」と呼ばれている（Lieber（2024）などを参照）。例えば、truck driver が従属複合語の例である（「『トラックを運転する』人」という意味なので、「drive が truck を取る」ことが基になっているという解釈である）[21]。

注21）“attributive compound”と“subordinative compound”という名称の代わりに、“root compound”（語根複合語）と“synthetic compound”（総合複合語）という名称が用いられることもある。

もし、日本語と英語の複合語のアクセントの配置に同じような原則があるのならば、従属複合語のアクセント型が限定複合語のそれとは違ってくれると、私としては非常にありがたい。ところが、残念ながら trúck drìver となり、blácklbòard などと変わらない。では、なぜ trùck dríver や trúck dríver とはならないのであろうか？　私の答えは「おそらく、driver（および $drive_N$）に備わっていた動詞性・述語性がなくなり、後半要素が名詞化してしまっているから」である。以下は Wayne Lawrence 氏に英訳のネイティブチェックをお願いした結果であるが、これからも、その変化が窺える。

(34)a. 彼はトラック運転手です。
He is a truck driver.
答え：OK

b. 彼の仕事は「トラック運転」です。
His job is “truck driving.”
答え：OK（だけど一番目の英訳の方が自然）

c. 彼の仕事は「トラック運転」です。
His job is “truck drive.”
答え： 全くダメ。*二つ。

“drive”という語は、「(車の) 運転」というよりも、「(車による) 小旅行」という意味が主になっていることも影響しているかもしれないと思い、Lawrence 氏に、追加で、「もし、仕事ではなく、趣味でトラックを運転することを表すのであれば、“His hobby is truck drive.”という英文は可能でしょうか？」と尋ねてみた。すると、「“truck drive”の例は最初は思いつきませんでしたが、“car drive”なら “Let’s go for a car drive.” は言えるかもしれません」とのことだった。

ところで、以下の(35)の例から窺えるように、英語の複合語でも、動詞・形容詞性が強くて、名詞らしさがない・なくなる場合には、(「前半が強い」という) 標準型とは異なる複合語アクセントが与えられやすくなるのかもしれない（なお、辞書によっては水平強勢（level stress）を与えているものがあるが、ここでは、*Longman Pronunciation Dictionary*（*LPD*）3rd ed.を参照して、水平強勢型は避け、どちらがより強いかをはっきりさせた。ただし、*LPD* の ˈ = primary stress, ˌ = secondary stress で表す記述を、acute accent mark “ˊ”と grave accent mark “ˋ”を使うものに書き換えている。また、2 通りのアクセント型が挙げられていたものはスラッシュで併記した)。

(35)a. 複合形容詞の例
ìce-cóld, wòrld-fámous, fàt-frée, bràND-néw, lòng-lífe, pàrt-tíme, gòod-lóoking, hàrd-bóiled, hànd-máde, kìnd-héarted（ただし、cólor-blìnd, sún-bàked などもある。）

b. 複合動詞（副詞＋動詞）の例
dówn-sìze/dòwn-síze, ùpgráde/úpgràde

c. 複合動詞（前置詞＋動詞）の例
ùpsét, ùnderéstimate

d. 複合動詞（名詞＋動詞）の例[22]
hàndpíck「～を手で摘む」, hándwàsh「～を手で洗う」, próofrèad（proofreader からの逆成語（back-formation）なので、動詞が基になっているわけではないかもしれない。）

e. 複合動詞（動詞＋動詞）の例
stìr-frý「かき混ぜながら素早く炒める」, frèeze-drý「凍結乾燥させる」

注 22）handwashing であれば、「手で洗うこと」と「手を洗うこと」の両方の意味がある（『新英和大辞典　第六版』（研究社）などを参照)。ところで、handpick や handwash の hand は、（pick や wash が道具（instrument）という主題役割（θ -role）を要求するわけではないので、）項ではなく、付加詞（adjunct）である。Sugioka（1984）が指摘しているように、前半要素が項か付加詞かによって、日本語では連濁に違いが出る（cf. かんけり（缶蹴り）vs.まわしげり（回し蹴り）、さかなつり（魚釣り）vs.いそづり（磯釣り））。そして、ついでに言えば、これらの日本語の複合語の例ではアクセントの有無の違いもある。よって、もしかすると、(35d)の例のアクセントの不統一性は、前半要素が（項ではなく）付加詞であることが少し関係しているのかもしれない。

日本語の例で補足的なことを述べると、例えば、「ダイヤ改正」という複合語を、「ダイヤを改正すること」という意識で言えば「ダ'イヤカイセー」となるが、単に「ダイヤの改正」という意味で言うときには「ダイヤカ'イセー」となりそうである（cf. 太田（2016））。

蛇足ながら、従属複合語形成において動詞の（結果として目的語になる）項が前半要素として取り込まれる過程を（意味的に）表現すれば、日本語では、「憲法を改正する」→「憲法改正」という具合に（接尾辞的な動詞の）「する」が削除されると言える。一方、英語では逆に、drive a truck → truck driver/truck driving のように、名詞形成接辞が付加される。さらに、英語では項（目的語）の前方への移動も起こっていると言えるかもしれない。これらの相違点も気になるところであるが、今回はこれ以上の分析・考察は行わないことにする。

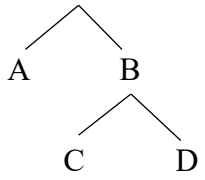
3.5. 残された課題とその解決方法

上では、「憲法改正」のような漢語の複合語が非標準的なアクセント型を示すことを論じたが、主要部が和語の場合にも非標準的なアクセント型を示す場合がある。例えば、「バイク買い取り」、「図書貸し出し」などがそうである（同僚の和田学氏からの personal communication でのご指摘）。例えば、「バイク買い」や「バイク乗り」ならば、「バイク'かい」、「バイク'のり」となり問題はない[23]。では、なぜ「バイク買い取り」となると、「バ'イクかいとり」という非標準的なアクセント型になるのであろうか？

注 23）「買い」や「乗り」は、「買う」や「乗る」という動詞の連用形の名詞化したものであるが、この連用形由来の語は、動詞性が薄くなり、名詞性が強くなっていると思われる。まただからこそ、国語辞典には《名（詞）》としか書かれていない。

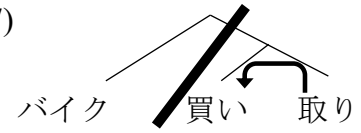
まず注目すべきは、「バイク買い取り」の後半要素の「買い取り」自体が複合語であるということである。そして、「買い取り」の意味は、「買って自分のものにすること」なので、主要部は「取り」である。そこで閃くのが、「複合語のアクセントの計算は、主要部が c 統御（c-command）する範囲で行う」という仮説である。

(36)（言わずもがなの）c-command:



A は B, C, D を c-command する。
C/D は D/C を c-command する。

(37)



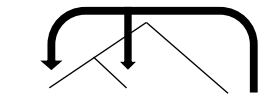
※「取り」が c-command するのは「買い」だけなので、「買い取り」という複合語の

アクセントの計算をし、平板式アクセント・無アクセントを選択することになる[24]。「バイク」は「取り」に c-command されないので、独立してアクセントを計算することになり、元々の「バ'イク」というアクセントがそのまま採用される。そして 2 つを合わせれば、「バ'イクかいとり」というアクセントになる。

注 24）例えば、「取り」や「答え」や「戻し」は（『精選版 日本国語大辞典』などの記述にもあるように）動詞の連用形からできた名詞である。そして、これらは単独では有アクセントである（しかも、尾高型もしくは中高型という特徴がある）。ところが、なぜか、もう一つの連用形由来の語と複合させた「受け取り」、「受け答え」、「買い戻し」などでは無アクセントになることが多い。この理由が私には不明であるので、今後の解明課題としたい。

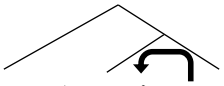
窪薗（1999）などは、複合語のアクセントに関して、「右枝分かれ構造の場合には通常の規則が適用されなく（されにくく）なる」という指摘をしている。しかし、c-command するか否かという分析をすれば、右枝分かれか左枝分かれかということは全く問題にならない。以下の対比例で確認してみよう。

(38)a. 「日本語学会」の場合：



にほん ご がっかい
∴にほんごが'っかい

b. 「日本英語学会」の場合：

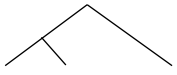


にほん えいご がっかい
∴にほ'ん||えいごが'っかい　（||はわずかな「休止」があることを表す。）
※つまり、「日本」は「英語学会」とは独立にアクセントを持たざるを得ない。

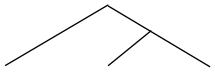
3.6. 「右枝分かれ構造」は特殊ではない

窪薗（1999）などは、「連濁も右枝分かれ構造の場合には適用されにくい」とし、以下の対比例を示している。

(39)



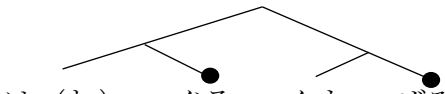
お じろ　わし（尾白鷲）



もん しろ　ちょー（紋白蝶）

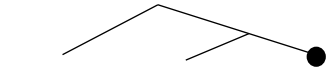
この分析・見解にも反対したい。連濁には、「右枝条件（Right Branch Condition）」があり、終端（terminal）部分で右側にきた要素が連濁する（Otsu（1980））。右枝（right branch）と右枝分かれ（right-branching）は異なるので、混同すべきでない。以下は私が作った架空のセミの名前であり、（右枝分かれ構造を含んだものもあるが、）どれも右枝条件で難なく説明でき、なんの例外性もない。

(40)a.



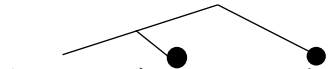
は（ね）　ぐろ　くま　ぜみ（「羽が黒い熊蝉」を意図）

b.



しろ　きつね　ぜみ（「狐のような蝉で、色が白っぽいもの」を意図）

c.



あか　ぎつね　ぜみ（「赤狐のような蝉」を意図）

3.7. 英語の複合語アクセントの説明にも c-command は有効

3.7.1. 強勢の相対的な強さの計算方法

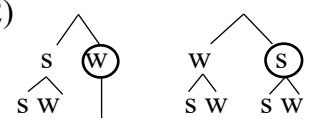
英語は、多音節語の場合に、複数の強勢を持ち得るので、それらの相対的な強さを決める原則が必要となる。Liberman and Prince（1977）は、以下の規則を提唱した。

(41)Lexical Category Prominence Rule（LCPR）

In the configuration [N1 N2], N2 is strong iff it branches.

要するに、「右側の節点が枝分かれしていれば、そしてその場合にのみ、右側が強い（枝分かれしなければ、右側は弱い）」というものである。具体例で確認してみよう（anecdote の強勢配置については注 7 も参照）。

(42)



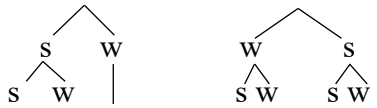
anecdote　anecdotal

＋ − ＋　＋ − ＋ −

「右側の節点が枝分かれしていれば、・・・」というのは、ただ結果に合わせて述べただけのように思われるかもしれない。しかし、「右側が枝分かれするほど長い語」というのは、おそらく、ゲルマン系の語ではなく、ラテン系の語をイメージしやすいので、後ろ側を目立たせるアクセント型になるのだと推測する。

そして、複合語も「語」であるので、この LCPR が当てはまる。例えば、地名にも一種の複合語がよくあるので、そのパターンを紹介しよう。

(43)



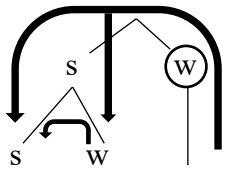
Sánta Crùz　Sànta Clára

Clara は 2 音節なので右側が枝分かれした状態になるが、Cruz は 1 音節なので枝分かれしない。その結果、（同じ Santa がついているが、）強勢型が逆になる。

3.7.2. 英語の複合語のアクセントを c-command で捉え直す

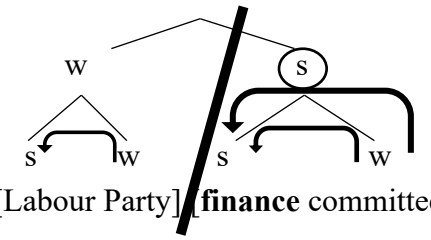
例えば、blackboard eràser を見ると、「英語の複合名詞は、長くなっても、先頭の要素を一番強く言えばよいのだ」と思えるかもしれない。しかし、実はそれほど単純ではない。例えば、Labour Party finance committee という例では、3 番目の finance が一番強い強勢を持つ。だが、特別な規則を作らなくても、通常の規則の適用範囲を、既述の c-command に基づいて決めるようにすれば、こういった一見例外的なパターンも説明ができるのである（blackboard と Labour Party と finance committee は、それぞれ複合語なので、前半要素の black と Labour と finance が強いということは既定のこととする）。

(45)a.



[**black**board] eraser

b.



[Labour Party] [**finance** committee]

blackboard eraser の場合には、通常の複合語規則が 2 回適用でき、black が最強となる。一方、Labour Party finance committee の場合には、前半の複合語と後半の複合語のそれぞれには通常の複合語規則が適用されるが、全体の計算においては、主要部の committee が c-command できるのは finance だけなので、finance に再度強勢を与えるしかない。結果として、LCPR が言うように、右側が枝分れしたときだけそちらが強い（最強なのは前から 3 番目の語）、という強勢配置になるのである（より詳しくは、太田（2019）をご覧いただきたい）。

3.8. まとめ

複合語のアクセントの配置に関して、「英語では前半（先頭）要素が強いが、日本語では後半が目立つ」といった目安が知られているが、本節では、そうはならない例を扱った。そして、項構造や c 統御といった統語論・意味論で用いられてきた概念・装置を応用することで、非標準的なアクセントのパターンを説明できることを示した。

（補記）複合語形成過程とそれに連動した複合語のアクセント規則を、例えば(23)のレキシコンの中に加えることはもちろん可能である。その配置は、「『-さ』の付加」の前後辺りになるだ

ろう（2.4.2 節で触れたように、複合語にも「-さ」を付加できるからである）。

ところで、レキシコンの中に、形態過程と音韻規則を配置していくことは、「レキシコンでは、個々の語彙項目とそれに関連する個癖的で予測不可能な情報をすべて、そしてそれのみを（素性の形で）指定する」という主張・前提（例えば、Smith and Allot（2016＝2019: 70-73）を参照）へのアンチテーゼと映るかもしれない。仮に、レキシコンの情報をできるだけ少なくし、PF や LF の働きを大きくする文法モデルを、以下の(i)の末広がりの三角形だとすれば、レキシコンの役割・規則を増やすモデルは、以下の(ii)の頭でっかちの逆三角形型と言えるかもしれない。

(i) (ii)

しかし、私はレキシコンに含まれる情報・内容や役割を無秩序に増大させようとしているわけでない。暗記するしかない語の情報に加えて、規則的に処理できる語特有の事柄をレキシコンに収めたいだけである。語形成のプロセスと関連する規則や条件などをレキシコンに加えたからといって、上の(i)を(ii)にひっくり返すほどの激変を引き起こすことになるとは私は思わない。句や文の音韻・意味の計算（および語の最終的な発音や意味の調整と決定）を PF や LF が担っても、語の音韻・形態・意味の（あらかたの）決定はレキシコンで行ってしまえば、それこそが形態論・音韻論の分散――「分散」という用語は、「1 箇所にあったものを分け散らす」ではなく、「複数の部門の協働で処理を行う」を意図している――になるだろう。また、このようにした方が、文法部門の一部に荷重負担をかけることもあるまい。

が、どのようなモデルを自然だ・不自然だと感じるかは、人それぞれで、最後は「（譲れない）信念」ということになるのかもしれない。

４．結論に代えて

私は、学生時代に、長谷川欣祐先生（東京大学）の集中講義を受講しました。そのときに、長谷川先生が「やっぱり（Generalized）A-over-A Principle が一番いいですね」と強調されました。それで、「先生は、最新の理論よりも、ご自分が若い頃に覚えられた理論がお好きで、そこから離れられずにいらっしゃるんだな」と少し冷ややかに思ったことでした。ところが、いつの間にか私も、自分が学生時代に覚えた 80 年代の理論の郷愁にひたる老人になっていました。皆さんは、こうならないようにしてくださいね。

参照文献

Allen, Margarett. 1978. *Morphological investigations*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut, Storrs.

Chomsky, Noam. 1970. Remarks on nominalization. *Readings in English transformational grammar*, ed. by Roderick. Jacobs and Peter Rosenbaum, 184-221. Walnut, MA: Ginn.

Crystal, David. 2008. *A dictionary of linguistics and phonetics*. 6th edition. Malden MA: Blackwell.

Fallows, Deborah. 1981. Experimental evidence for English syllabification and syllable structure. *Journal of Linguistics*. 17. 309-317.

Gordon, Peter. 1985. Level-ordering in lexical development. *Cognition* 21. 73-93.
Hagiwara, Hiroko, Yoko Sugioka, Takane Ito, Mitsuru Kawamura and Jun-ichi Shiota. 1999. Neurolinguistic evidence for rule-based nominal suffixation. *Language* 75. 739-763.
Jackendoff, Ray and Jenny Audring. 2020. *The texture of the lexicon: Relational morphology and the parallel architecture*. Oxford: Oxford University Press.
影山太郎 1993.『文法と語形成』東京：ひつじ書房.
川越いつえ 2007『英語の音声を科学する　新装版』東京：大修館書店.
Kennedy, Chris. 2000. Topics in minimalist syntax. 日本言語学会夏期講座ハンドアウト（Online: https://semantics.uchicago.edu/kennedy/classes/japan/lsj.html）.
Kiparsky, Paul. 1973. 'Elsewhere' in phonology. *A Festschrift for Morris Halle*, ed. by Stephen R. Anderson and Paul Kiparsky, 93-106. New York: Holt, Rinehart and Winston.
Kiparsky, Paul. 1982. From cyclic phonology to lexical phonology. *The structure of phonological representations (Part I)*, ed. by Harry van der Hulst and Norval Smith, 131-175. Dordrecht: Foris.
Koutsoudas, Andreas, Gerald Sanders and Craig Noll. 1974. The application of phonological rules. *Language* 50. 1-28.
窪薗晴夫 1995『語形成と音韻構造』東京：くろしお出版.
窪薗晴夫 1999『日本語の音声』東京：岩波書店.
窪薗晴夫・太田聡 1998『音韻構造とアクセント』東京：研究社.
Liberman, Mark and Alan Prince. 1977. On stress and linguistic rhythm. *Linguistic Inquiry* 8. 249-336.
Lieber, Rochelle. 2024. *Introducing morphology*. 3rd edition. Cambridge: Cambridge University Press.
中村捷・金子義明・菊地朗 2001『生成文法の新展開：ミニマリスト・プログラム』東京：研究社.
Ohta, Satoshi. 1987. On ordering paradoxes in morphology. *English Linguistics* 4. 38-54.
太田聡 1991「人間言語の諸特性について（1）」『英語と英米文学』26. 1-35.
太田聡 1992「可能な派生を制限する 2 つの原理：非該当・最小努力の原理」『英語と英米文学』27. 11-32.
太田聡 1997「語彙音韻論のはなし」『英語と英米文学』32. 19-40.
太田聡 2005「SPE 理論とそれ以前の音韻論」西原哲雄・那須川訓也（編）『音韻理論ハンドブック』15-34. 東京：英宝社.
太田聡 2006「屈折の具現をめぐって」岩部浩三（編）『時制とその周辺領域の統語的・意味的研究』（平成 15 年度～平成 17 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書. 課題番号 15520311）155-168.
太田聡 2009「『～する人［もの］』を表す接尾辞-or について」『近代英語研究』25. 127-133.
太田聡 2010「日本の地名のアクセント型とラテン語アクセント規則との不思議な関係について」『異文化研究』4. 1-14.
太田聡 2016「日本語複合語の不規則なアクセント型についての予備的考察」『文学会志』66. 89-99.

太田聡 2017「日本語の名詞形成接尾辞「-さ」と「-み」について」田中真一ほか（編）『音韻研究の新展開：窪薗晴夫教授還暦記念論文集』85-97. 東京：開拓社.
太田聡 2018a「日本語複合名詞のアクセントについて」西岡宣明ほか（編）『ことばを編む』126-135. 東京：開拓社.
太田聡 2018b「日本語複合名詞の非標準的アクセント型について」『音韻研究』21. 81-88.
太田聡 2019「複合名詞のアクセントと c 統御」『音韻研究』22. 67-74.
Otsu, Yukio. 1980. Some aspects of rendaku in Japanese and related problem. *MIT Working Papers in Linguistics* 2. 209-227.
Pinker, Steven. 1999. *Words and rules: Ingredients of language*. New York: Basic Books.
Radford, Andrew. 2016. *Analysing English sentences*. 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.
島村礼子 2002「語を作る仕組み：形態論 2」大津由紀雄ほか（編）『言語研究入門：生成文法を学ぶ人のために』89-101. 東京：研究社.
Siegel, Dorothy. 1974. *Topics in English morphology*. Ph.D. dissertation, MIT.
Smith, Neil and Nicholas Allot. 2016. *Chomsky: Ideas and ideals*. 3rd edition. Cambridge: Cambridge University Press. 今井邦彦ほか（訳）2019『チョムスキーの言語理論：その出発点から最新理論まで』東京：新曜社.
Sugioka, Yoko. 1984. *Interaction of derivational morphology and syntax in Japanese and English*. Ph.D. dissertation, University of Chicago.
Tsujimura, Natsuko. 2014. *An introduction to Japanese linguistics*. 3rd edition. Chichester: John Wiley & Sons.
Zamma, Hideki. 2013. *Patterns and category in English suffixation and stress placement: A theoretical and quantitative study*. Tokyo: Kaitakusha.